

## 報告

### 近藤恒弘氏に天津日本租界での体験を聞く

日時：2014年6月12日（木）

場所：神奈川大学 非文字資料研究センター

聞き手：栗原 純（神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者・東京女子大学教授）

KURIHARA Jun

大里浩秋（神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員・神奈川大学名誉教授）

OSATO Hiroaki

#### まえがき

本聞き取りは、戦前、天津日本租界で生まれ、そこで少年期を過ごされた近藤恒弘氏から、神奈川大学非文字資料研究センター租界班の大里浩秋と栗原純により、実施された。内容は租界時代のこと  
が主な対象であるが、戦後すぐの現地の様子や最近の旧租界の変貌ぶりにも触れており、お話しのと  
ころどころに近藤氏の提供による写真や絵はがきを添えている。

なお、この聞き取りは、栗原が代表を務める科研「日本の敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変  
容の口述歴史に基づく研究」の一環でもある。

#### 〈近藤恒弘氏の略歴〉

1929年9月24日	天津日本租界山口街1番地にて出生
1934年4月	天津日本幼稚園に入園
1936年3月	同園卒園
1936年4月	天津日本第二尋常小学校（後の淡路小学校）入学
1942年3月	天津日本淡路国民学校卒業
1942年4月	天津日本中学校入学
1945年8月	終戦により中学4年の終了証明をもらい自宅待機となる。
1946年5月	愛知県に引揚げる
1954年3月	早稲田大学理工学部卒業
1954年4月	国洋電機株式会社入社
1963年12月	東芝電子音響株式会社入社
1968年1月	米国企業チャンネルマスターファースト入社
1981年5月	ミツミ電機株式会社嘉義工場に勤務
1994年3月	同社退社後台湾、中国にて数社の管理業務を行う
2002年3月	日本帰国

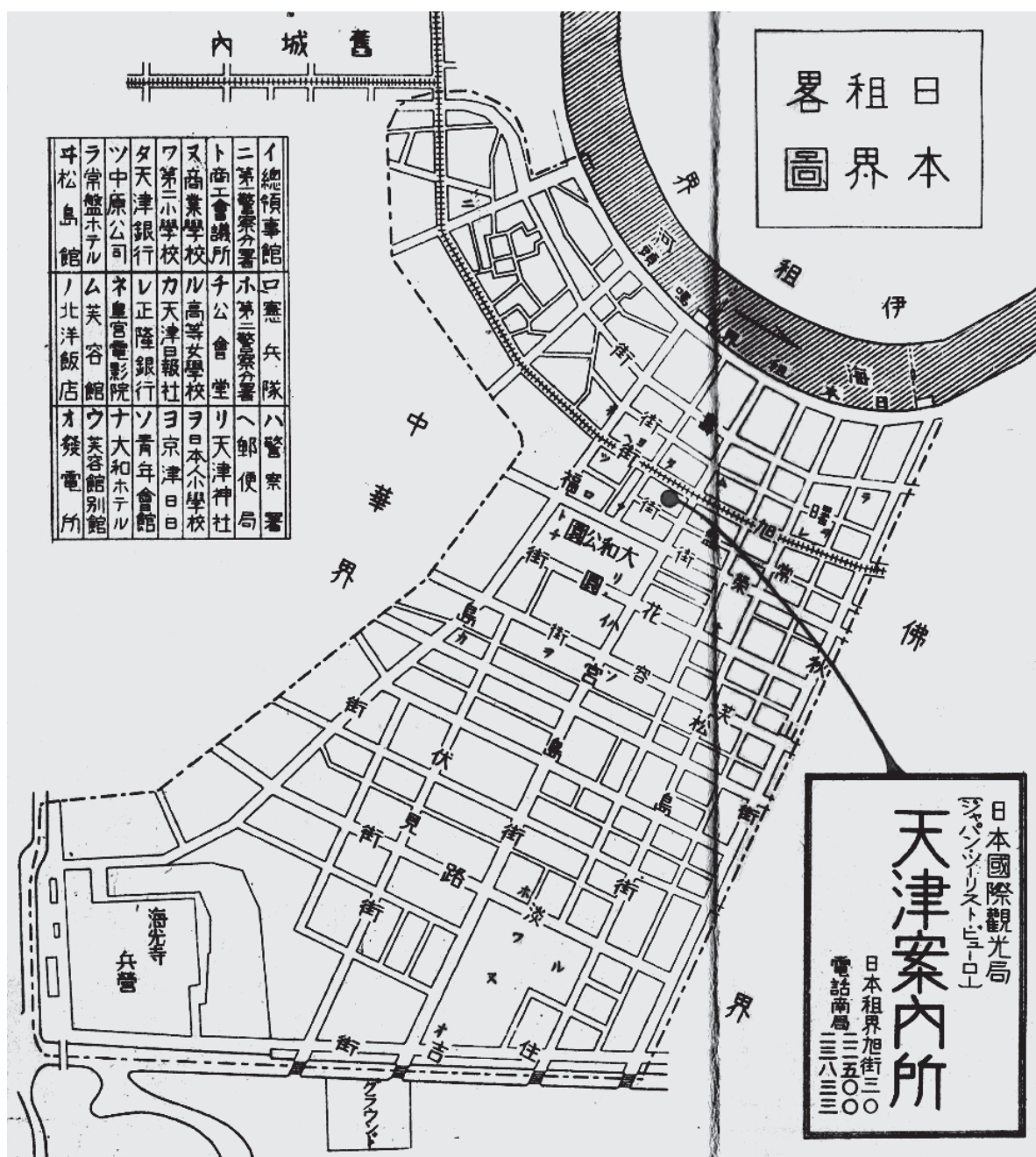


図1 天津日本租界略図 日本國際觀光局パンフレット『天津』（昭和11年発行）所収

栗原 お忙しいところすみません。きょうはよろしく  
お願いします。戦前は天津で幼少年時代を過ごされ、  
終戦後帰国されてからは台湾でお仕事をされた経験を  
お持ちですが、今回は、天津で過ごされた頃のことを  
伺いたいと思います。天津で1929年に生まれたとい  
うのは、お父さんの仕事の関係ですか。

近藤 ええ。うちの父が三井洋行（三井物産の中国で  
の社名）に勤めていたんですね。父は、18歳の時に  
天津に渡っているんです。ですから、1917年頃に天  
津に渡って、それで私の祖母の兄貴というのが天津に  
いたんです。父にすれば母の兄さんが天津におりまし  
て、その人は1901年に天津に行っているんです。日  
露戦争の頃に特別招集されて、例の青木（宣純）大佐  
や、沖（禎介）・横川（省三）が諜報活動をやった、  
北京であのグループの総務関係みたいなのをやってい  
たんですね。



写真1 近藤氏ご一家  
前列中央 日高松四郎氏、その左隣 近藤氏  
後列右 父上・武彦氏、左 母上・小枝さん

栗原 軍人ではないんですか。その時は招集されて？

近藤 特別に招集されたんですけども、軍人とい  
うのか何というのか、要するに特務関係のそういった仕  
事をやったんですね。その後、うちの父の場合はあま  
りはっきりした履歴がないですけども、支那何とか  
研究所というところへ行っているんですね。

栗原 それは、お母さんのお兄さんのところですか。

近藤 そうそう、母親の兄のところですね。それか  
ら、2、3年してから三井洋行に入ったみたいですね。

栗原 その研究所云々というのは、天津にあって？

近藤 天津です。

栗原 お父さんのご出身はどこですか。



写真2 左正面が三井洋行

近藤 愛知県です。

栗原 ジャあ、18歳の頃に愛知から天津に行かれ  
て、その後、天津で三井洋行に就職されてということ  
ですね。

近藤 父は、兄弟の学費などで借金したためか、要す  
るにお金がなくて前借りで行ってるみたいですね。

栗原 中国に渡るときですか。



写真3 三井洋行社宅  
近藤家は3階に住んでいた



1942年、中学1年の時に動員で行った米国兵営





写真4 義昌洋行付近

近藤 ええ。

栗原 その後、ずっと三井でお父さんは働いてらっしゃって。

近藤 いや、その後、会社をいくつか変えていました。義昌洋行というのがあるんですけども、義昌洋行は中国ではラジオ放送なども早くから始めたということで、NHK が日本でやったのとはほぼ同じぐらいのときにラジオ放送をやっているんですね。そこの責任者をちょっとやっていて、それから後、三昌洋行という貿易会社があるんですけども、そこに変わりました。父はけっこう中国人の友達が多くて、中国語もペラペラで、本当に中国人よりも上手な中国語でやっていたんじゃないかと思うんです。それで、私の父の友達には国民党の地下工作の人などもいたみたいですね。終戦後は、その人が日本の位でいくと少将になっていて、引き揚げのときにはけっこう面倒を見てもらいました。

栗原 そうすると、天津時代はずっと租界で生活していらして。

近藤 租界で生活していました。

栗原 学校も、日本人だけの学校ですか。

近藤 天津の日本人学校というのは非常にオープンでして、どこの国の人も入れるんですよ。ただ、人数が少ないだけであって。ですから、私の同級生にはロシア人、韓国人、それから台湾の人、中国の人、それからあの頃は満州の人、それから日本人という格好でしたね。

栗原 もちろん授業は日本語で、日本語の教科書を使って。

近藤 日本語でやりました。ですから、私の同級生で

ロシア人などは、終戦後、アメリカ軍が天津に入ってきましたから、そのときにアメリカ軍の通訳をやっていて、降伏調印のときとかにぜんぶ立ち会ったりしていましたね。

栗原 日本語ができるということですか。

近藤 日本語もできるし中国語もできるし、英語もできるということ。

栗原 天津に入ってきたのは、国民党ではなくてアメリカ軍なんですか。

近藤 アメリカ軍のほうが武器を持っていましたね。国民党の軍隊というのは、入ってきたときは本当に惨めなものです。1 個分隊が 20 人ぐらいありますけれども、そのなかで武器を持っている人は 1 人で、他の人はぜんぶ手ぶらです。天秤棒です。

栗原 制服などは着ているんですか。

近藤 制服なんていうものじゃないです。ボロボロです。それで、2、3 日たつとみんな日本の軍服を着るんです。

栗原 ああ、日本軍から接收したので。

近藤 ええ。それと、南方から来ていますから北京語がしゃべれないんですね。ですから、私たちが日本人だか中国人だかわからないんです。確かに、中国の軍隊のレベルというのは優秀な人は優秀ですけども、下のほうの人は、私どもも動員で中国の捕虜の人と付き合いましたけれども、国際法で将校は使役には使えないということで、将校の人は監督のような格好になっているんですけども、その将校の人に学歴を聞いたら小学校です。その下の、下士官の人というのは字が書ける人ですが、一般の兵隊さんというのは字も書けなかったですね。それを聞いたときには私もびっくりしました。実際に私がいた頃、中国の場合は字の書けない人は 70% ぐらいでしたから、無理もないと思うんですけども。

栗原 近藤さん自身が天津にいるときに軍に徴用されるとか、そういうことはなかったんですか。

近藤 学徒動員だけです。ですから、軍隊のほうへ行ったり工場へ行ったりということです。中学 1 年のときは廃品回収ぐらいで、2 年になると飛行場の草刈りをやったり、軍の農場に行ったりとか。1 年のときに、ちょうど米軍の兵営を接收したので、その整理



写真5 右下は貨物廠

近藤氏は、中学3年の時（1944年）に糧秣関係の仕事に配属されてここで働いた

を手伝わされたことがありましたね。3年ぐらいになるとだんだん本格的になってきて、昔の中国の東機器局の後に貨物廠というのがありまして、我々の学年は各クラスに分かれてやったんですけれども、私は糧秣関係に配属されたものですから、そこで捕虜の監督をさせられました。

栗原 それは、国民党の捕虜ですか。

近藤 ええ、国民党です。あの頃は八路軍の捕虜もいたんですが、別々の場所に収容していたんですね。それで、4年になると今度は工場に行きまして、小銃を造らされました。そこは、松浦さんという人のお父さんがやっておられた昇恒機器というところで、そこには溶鉱炉がありまして、銃鉄ですから、そこから銃身などをぜんぶ造っていましたね。

栗原 ジャあ、かなり大規模な小銃の製造工場みたいなのがあったんですね。

近藤 それでも終戦ちょっと前に、三八式歩兵銃のちょっと銃身を短くしたやつを造ったものですから、性能的にはあまりよくなかったみたいですね。そこで記憶があるのは、終戦の1週間ぐらい前に工員がストライキを起こしたことです。憲兵が来て彼らを捕まえていったんですけれども、2、3日したら彼らが帰ってきたんですね。いま考えてみますと、もう日本が負けたというのがわかっていたから、それで帰したんじゃないかというふうに思うんです。

栗原 そのストライキというのは、何か理由とか？

近藤 いや、理由は聞いていません。たぶん、日本が負けたというのがわかったから、じゃあというのでやったんじゃないかと思うんですけれども。

栗原 その負けた時、租界に住んでおられて何か記憶に残っているということはあるですか。

近藤 日本の軍隊がぜんぶ武装解除が終わった後に、10月に暴動が1回ありましたね。

栗原 誰が暴動を起こすんですか。

近藤 中国人が。日本人を見つけたら、ぜんぶもう。それは1日だけでしたね。

大里 日本人をどうしたんですか。殺した？

近藤 いや、殴るだけです。殺しはしなかったですね。殴って、持ち物はみんな取られてしまいましたね。

栗原 それは、誰彼かまわずなんですか。それとも、日本人の中で誰かを狙って？

近藤 いや、日本人だったら誰でもです。

栗原 それは、家の中にまで入ってきて？

近藤 いや、それはしなかったですね。

栗原 街頭ですか。

近藤 ええ。

栗原 それも、1日だけということですか。

近藤 はい。

大里 知っている中国人ですか。

近藤 いやいや、私が窓から隠れて見たのは、煽動していた中国兵の若い将校クラスでしたね。

栗原 天津の場合はずっと国民党ですから、国民党とアメリカ軍が戦後は治安を握っているという格好ですね。

近藤 はい。それで、戦後しばらくたって天津に行って調べてみたんですけど、我々が住んでいたちょっと先が、もうぜんぶ八路軍の地域だったんですね。それで、私の通った中学は南開大学の中にあったのですけれども、その南開大学思源堂の屋上に日本軍のレーダー



写真6 終戦後引揚げまで住んでいた住宅



写真7 機関銃隊の行軍。向こう側の建物は六里台にある中日学院

ーが備えつけられていたんですよ。レーダーの外枠は木製でしたが、その周りは鉄条網がめぐらされていたんですけど、その囲いの中に八路軍が入ってきて守備をしている日本軍と撃ち合いになったことがありましたね。ですから、我々なんかはよく郊外の方に遊びに行っていたけれども、いま考えて見ると、よく捕まらなくて平気だったなと思いましたね。

**大里** 南開大学が空襲を受けた、要するに日本軍が空襲した、その頃はおられたんですか。

**近藤** ええ。それは昭和12(1937)年です。私が小学校2年のときですね。それで、あの時は六里台と八里台、天津城から6里(中国の1里は500m)のところと8里のところの地名なんです、六里台で砲撃戦をやったわけですけど。六里台には中日学院<sup>(3)</sup>というのがありまして、昭和12年の時は日本の砲兵隊がそこに来て、砲撃戦をやったと。また八里台で爆撃をやった後、いろんな話を聞くと、日本兵が行ってガソリンを撒いたということなんですね。

**大里** いま行っても、南開大学の中にはそういう記念



写真8 南開大学木斎図書館爆撃跡



写真9 爆撃後の思源堂

のプレートがありますよね。図書館がその時の爆弾で壊されて貴重な本が焼かれたとかね。

**近藤** もう、行ったら爆撃の後には本は散乱しているしね。それから、今は新しい建物が建っていますけれども、思源堂の東側のところには平屋の標本室とか実験室みたいなのがずっとあったんですよ。そのところは、アルコール漬けの標本なんかでもグチャグチャになっていましたね。私が中学に入ったときも、まだ標本は残っていましたね。

**大里** その辺一帯が日本軍に砲撃されたというような説明がありましたね。

**近藤** 思源堂も、写真を見ていると真ん中がドンと壊れていますね。私がいちばん最初に見に行ったときは、木で階段をつくっていて、それで屋上まで行った記憶があるんですけども。

**大里** 思源堂が図書館ですか。

**近藤** いや、図書館は思源堂の反対側なんです、池の。あそこを通ると銅像が立ったり茂みになっているんですけど、昔はあそこに池があったんですね。それで、私が中学のときにあの池をぜんぶ埋めてしまったんですけども、その反対側のところにまた馬蹄形型の池がありますけれども、その向かい側のところが木斎図書館なんですね。今は、あそこは何になっていたかな。昔の建物が残っているのは2棟だけですね。あと、入ってすぐのところの左側にずーっと平屋の建物があるんですけども、あれが私らのときは教員宿舎<sup>(4)</sup>でしたね。

**栗原** 戦争中、空襲とか地上戦というのは、天津の近藤さんの住んでおられた近くではぜんぜんなかったん





写真10 天津市政府爆撃（1937年）の跡

ですか。

近藤 地上戦があったのは昭和12年の時と、あとは昭和6年の11月頃の第一次天津事変というのがあるんですけども、それぐらいじゃないですか。でも、昭和12年の時は日本租界は被害が少なかったんですけども、海光寺（ハイコンス）兵営には攻撃があったようで、当時の商業学校の学生が動員され学校の兵器庫にあった三八歩兵銃をもって応戦したと言うのを聞きました。その時兵員が不足しており衛生兵も駆り出されたようですが、衛生兵は銃の扱いを知らないのでもごまごましていたそうです。一方、日本軍の方は先ほどお話した南開大学などへの攻撃の他に、いろんなところを爆撃しました。

栗原 天津の市内ということですか。

近藤 ええ、駅とか、それから市政府のところとか。

大里 あれはつまり、盧溝橋事件がきっかけですか。

近藤 そうです。天津では7月29日ですから、7月7日に盧溝橋事件があって、それから約3週間ぐらいたった後ですね。7月29日以降は日本の飛行機が低空で飛び回っておりました。最初は複葉機でしたが、そのうちに単葉機になった記憶があります。天津の場合は、要するに昭和11年、12年の以前にいた人たちと、それからその後に来られた日本人というのが、考え方がちょっと違うみたいですね。後から来られた方は、戦勝国気分であって来られていますから。前の人は、要するに中国人と商売をやろうということで来られた方ですから。

栗原 そうすると、それを機会にして天津の租界とかに日本人の人口は増えるんですか。かなりたくさん？

近藤 ちょっとその資料を持って来なかったですけ

ど、昭和12年ぐらいで1万ちょっとじゃないかと思うんですが、終戦前が7万人ぐらいになっている。それで、私が生まれた頃というのが5千人とか6千人ぐらいじゃないですか。

栗原 やっぱ1937年以降、それこそ戦勝気分の日本人が天津に入ってくる。

近藤 やはり多いのが満鉄から来られた方で、華北交通がとにかく人口的には相当占めていると思いますね。

いま私、その絵はがきで、自分が住んでいた頃の絵はがきが何を意味するんだろうというのをちょっとやろうと思って、ずっと書き出しているんですよ。

栗原 たとえば、お話の中に天津の街の様子が出てきたら、そこに絵はがきの写真を載せていただくとよくわかるような気がしますけれども。この前、非文字の研究会の会場に展示されていた何枚かの絵はがきを見ても、路面電車ができる前とできた後とか、街の様子が変わっていきますよね。絵はがきって、そういうふうになんとある特定のところを系統的に集めることができる、いろんな情報がそこから読み取れるんだなという感じがしましたけれども。

近藤 あと、私はまだ整理できていないですが、絵はがきの中に風俗というか、物売りとかいろんなのがあるんですよ。あれが3、400枚あるんですかね。街の様子とそういったものを組み合わせながらやると、おもしろいかななんて思っているんですよ。それで、同級生なんかに聞いても、私が楽しんできたこととみんなが遊んできたことと違うんですよ。たとえばですけれども、よく叔父などと天津の郊外に釣りに行っただけですよ。釣りに行きますと、主に鮎ですけれども、それから草魚、ナマズ、雷魚と。

栗原 かなり大物ですね。ナマズとか雷魚なんかも引きが強そうだし。草魚は大きくなりますもんね。

近藤 ええ、そうですね。それで、鮎なんかでもこの程度の鮎を……

栗原 20センチオーバーという感じですか。

近藤 いや、15センチかそのくらいの鮎が、だいたい40匹ぐらい釣れるんですよ。

栗原 食べきれないですね。

近藤 鮎が群れをなして泳いでいるんですね。

栗原 見えるんですか。



写真11 白河の渡し舟。ここにあるようなフロートの上でナマズを釣った

近藤 見えるんです。それで、いちばんおもしろかったのは、軍の農場のところの池に行くと、中国人が行くと追っ払われるんですけど、日本人が行くと釣らせてくれるんですよ。そこは入れ食いなんですよ。

栗原 あまり人が釣りに行かないようなところで。

近藤 そうなんです。

栗原 釣りをして、その鮎とかナマズとか草魚とか食べるんですか。

近藤 ええ。ただ、私は生臭かったからあまり食べなかったですけど。それから、昭和14(1939)年<sup>(5)</sup>に英・仏租界の封鎖がありましてね。白河なんかでも、封鎖のときに山口街のところに検問所があったんです。検問所があって、日本の軍隊があそこにいたわけですよ。そこに遊びに行きますと、「ちょっと牛肉を買って来い」と言われて、お金を渡されて牛肉を買ってきて渡し舟のフロートの上から釣ると、40センチ、50センチぐらいのナマズが釣れるんですね。

栗原 牛肉でナマズを釣るんですか。

近藤 はい。

栗原 ナマズはやっぱり食べるんですか。

近藤 兵隊さんはみんな食べるのに釣ったんだと思うんですけど、私なんかはそのまま兵隊さんに上げました。

栗原 ナマズはおいしいですよ。先ほど出た軍の農場というのは、軍隊用に野菜か何かを栽培しているんですか。

近藤 それもありますし、米なんかもつくってましたね。

栗原 かなり本格的に。

近藤 米なんかは、私なども動員で行って田植えをや

らされたんですよ。一往復するのに1時間はかかりましたからね。

栗原 かなり広大な。

近藤 ズーっと地平線まで田んぼです。

栗原 ふだんは誰がそこで働いているんですか？

近藤 中国人です。

栗原 中国人を使って、働かせていた。

大里 おられた頃は、租界は空き地がないくらいだったんですか。

近藤 そうですね。ですから、運河の南側を埋め立ててどんどん増やしていった感じですね。

大里 租界じゃないけど？

近藤 いや、あそこは租界予備地だったんですね。

大里 そういえば、地図にもそう書いてありますよね。

近藤 はい、一応運河の先は日本租界になるようにはなっていますね。

大里 日本租界はだいたい埋まっていて、足りない部分はそっちにつくると。

近藤 はい。

大里 その頃は、沼地みたいなのはまったくないんですか。

近藤 どんどん埋め立てて、終戦前になるともうほとんどなかったですね。でも、その頃でも今の人口の10分の1ですもんね。百二、三十万人ですから。今は、千何百万といます。

栗原 日本租界に暮らしていても日常的に中国人とは接するんですか。それとも、租界の中ではほとんど日本人ばかり？

近藤 いや、中国人がけっこう多かったですよ。



写真12 当初の日本租界の様子を示す貴重な写真(うらに「明治」34年8月 天津道路工事」と書かれている)。初期の日本租界はほとんどが沼地だったが、工兵隊が道路工事をして埋立てを進めていった。



栗原 それは、中国人も租界に逃れてくる人がいたとか？

近藤 いや、そうではなくて、もともとそこに住んでいた。

栗原 それじゃ、雑居状態ですか。

近藤 雑居状態です。

近藤 やっぱり各国の貧富の差というんですか。イギリスとかフランスは富んでる国ですから、日本なんかは貧しい国で、貧しい国のところはやっぱりそれなりの建物しか建っていないですね。

大里 それを日本人は意識せざるを得ない状況でいたわけですね。

近藤 日本人の中でも差が結構ありますね。金山君のところなんかは金持ちですから、いい家に住んでいましたけど。

大里 そうすると、日本租界の中でも何とか街でやっぱり差は出てくるわけですか。

近藤 いや、何とか街というよりも、建物自体ですね。だから、私の家の前に住んでいた内山君というのは、広い敷地でちゃんと独立したい建物が建っていました。今でも残っていますけれども。

大里 ひと月の払いとか、宿代、土地代というのはどういう形で払うんですか。

近藤 私のところなんかは、毎月集金に来ていましたね。

大里 誰が？

近藤 中国人の集金人でした。

大里 ああ、そうですか。つまり、租界当局とか、日本の役所が一括して集めるというのではなくて。

近藤 いや、建物はみんな個人の所有ですから、民団<sup>(6)</sup>の場合は民団のアパートというのがありまして。

大里 それは民団のお金で払うんですか。

近藤 いや、民団のアパートというのは、要するに今でいうと県営住宅というような感覚ですね。

大里 それは、一括して払う感じなんですか。

近藤 いや、それは住んでる人がそれぞれ。

大里 じゃあ、個人がそれぞれに中国人の集金人に払うと。

近藤 そうです。

大里 土地を借りたということはわかるけれども、ど

うやって払うのかなと思っていました。

近藤 租界というのは、日本の法律に基づいて管理していますが、土地や建物に関する支払いは個人個人です。

大里 全体として守る立場は日本国だけれども、土地そのものは個人個人で処理すると。それで、集金人が毎月集金に来ると。

近藤 集金帳ですか、大福帳みたいな。あんなので集金していましたね。それで、もらったらぜんぶ判子を押して。

大里 わかりやすいな。それは、どこでもそうですかね。

近藤 いや、知りませんね。私が住んでいたところはそうでしたね。

栗原 じゃあ、租界にも土地台帳みたいなものがあるんですかね。これは誰の土地だという、それぞれの所有者がわかるような。

近藤 それはあるでしょうね。

大里 だいたい買う時に、どうしてその土地の持ち主が誰だとわかるんですかね。それはやっぱり、租界全体を日本が管理してるというので、ここは誰その土地だというのはわかっているんですかね。

近藤 そのへんのところになると、いちばんよくわかるのは東京建物じゃないかと思うんですよ。あそこが、ずっと埋め立てとかいろいろなものをやっていたから。いまでも日本にありますよね。あそこへ行って調べられると、そういったいろんな資料があるんじゃないかと思いますけど。

栗原 じゃあ、もともと租界の土地はすべて中国人の地主がいるということですね。

近藤 ええ。

栗原 近藤さんが住んでおられたのは借家ですか。

近藤 借家です。

大里 たとえば、金山さんとか金持ちの家もそうですか。

近藤 自分で買っているんですよ。

大里 自分で買って家をつくったとして、その場合でも土地を買うということはないでしょうね。

近藤 いや、あると思いますよ。

大里 そのへんになるとどうでしょうね。土地を買う



写真 13 昭和 14 年の天津水害

ことはできないと思いますが。租界の肝心のところがよくわからない。でも、近藤さんの場合は、確かに毎月、金を集金に来た人がいると。

近藤 はい。

栗原 その家の構造というのは、中国式の家ですか。

近藤 中国式の家を日本式に直しちゃっているんですね。日本間をつくったり畳を入れたり、襖を入れたり。板の間、ドアというのが基本ですけど。

栗原 元はそういう構造になっていたと。住む人によって、中国の人が住んだらそのまま使うとか、日本人だったら板の間を日本式の和室みたいに替えたりとか。

近藤 ですから、2階に上がるとわりと床をそのまま使っていますけど、1階の場合はちょっと段を高くして、それに畳を敷いているという格好ですね。

栗原 そんなところで、洪水なんかの心配はないんですか。

近藤 大洪水というのが、昭和 14 (1939) 年にありました。<sup>(7)</sup>それから、あとは大正の何年かにあったということですね。

大里 道路がまるで川のようになったんでしょ。

近藤 道路がというよりも、辺り一帯が。日本租界のところはいちばん深いところで 2メートルぐらいですかね。それから、私が住んでいたところでも 60センチか 70センチぐらい、ずっと 1ヵ月間、そのまま浸かったままでした。

栗原 向こうのは長いですよ。日本だと、1ヵ月も水に浸かるということはないでしょうけど。

近藤 日本の場合は急勾配ですから。向こうの場合は、水がどんどん上流から来ますから。

栗原 そのときのことはよく覚えていらっしゃると思います

か。

近藤 私は、ちょうど大水の前にチフスで入院していたんですよ。それで、入院していたらベッドの下に水がタラタラ入ってきた。

栗原 やっぱ病院にも。

近藤 はい。みんな 2階へずっと上げられて、それでしばらくしたら今度は河北の陸軍病院に連れて行かれて、それで治療したんですね。

大里 河北というのは、どこですか？

近藤 白河の北です。あそこに陸軍病院がありますね。

栗原 でも、伝染病だと、チフスだと隔離されちゃうんですか。

近藤 ええ、隔離病棟ですね。コレラはちょっと少ないですけど、チフスにかかる人、赤痢にかかる人というのは結構いました。予防注射を毎年、コレラと赤痢とチフスと、それから種痘とやっていました。

栗原 それでもやっぱりチフスにかかるんですか。

近藤 かかりました。

栗原 予防注射をしてもかかる人が出るのは珍しくないという感じですか。

近藤 ええ。それと、場合によっては予防注射をする前にもうかかっちゃうんですよ。その時期が来る前に。私は、いろんなものを食べちゃったからだめなんですよ。

栗原 予防注射というのは、日本人だけではなくて住人も全員ですか。

近藤 街に検問がありまして、通っている人が注射を打ったという証明書を持っていないとその場でパッと打つんです。

栗原 そうなんですか。通行人が無料で強制的に打たれる。

近藤 強制的に打つんです。しかも、予防注射というのは、私は子どもの頃は毎年やるものだというふうに思っていたんですよ。そうしたら、日本へ帰ってきたら種痘というのは 10年に一遍というでしょ。びっくりしましたね。

大里 太平洋戦争で日本が連合軍と戦うようになった、そういう時の記憶はありますか。

近藤 私がちょうど 6年の時 (1941年) の 12月なんですよ。真珠湾の攻撃がありまして、それで学校へ行



写真 14 英・仏租界封鎖に際し白河に日本工兵隊が架設した橋。  
「日本橋」と名付けた。

ったらまず先生に言われたのが、「戦争が始まったって授業は続けるから」でした。「福沢諭吉を見ろ。江戸で戦いをやっているときにも授業をやっていた。勉強をやらなきゃいけない」と。その日のことは覚えていますね。

栗原 開戦というのは、ラジオか何かでお知りになったんですか。

近藤 ラジオはあったんですけども、どうだったかなあ。とにかく、学校へ行って知ったのです。あの頃、ラジオ放送といっても、決まった時間しかやらなかったですもんね。

大里 隣がフランス租界でしょ。閉鎖するとかそういう動きはあったんですか？

近藤 いや、英・仏租界の閉鎖は、例の政治犯の引き渡しとかで、英国租界だかフランス租界に逃げ込んだ人を渡さないというので封鎖しましたね。あれは、昭和 14 年です。

大里 戦争があったから封鎖したというわけではないんですね？

近藤 戦争の時には、もうぜんぶ武装解除です。だから、租界の封鎖というのではなくて、ぜんぶ接收しちゃっていますから。

大里 武装解除して追い出すわけですか。

近藤 いや、武装解除して捕虜にするんですよ。

大里 普通の市民も捕虜ですか。

近藤 市民はそのままです。

大里 軍をですか。

近藤 軍です。その時にも兵器廠に動員で行って捕獲した銃なんかも見ましたけれども、やはり我々が教練に使っている銃と比べると非常に軽くて、いいなと思

った記憶がありますね。

栗原 三八式よりは、ずっと進んでいるという感じですか。

近藤 三八式は、口径が小さいんですよ。他の国の銃は口径が大きいんですね。ですから、口径が大きいほうが殺傷力が強いわけですね。それからいっても日本はかなわなかったんですよ。ちょっと日本は、実際には日清、日露なんかでもそんなに勝ったわけじゃないのに、あれで勝ったと思っているから大間違いなんですね。軍隊に、そういうところに奢りがあったんじゃないですかね。それと、第一次欧州大戦の時に、日本がけっこう漁夫の利を得ていますからね。漁夫の利を得ているというのは、確かに工業的にも商売が非常にうまくいったというのもあったんですけど、南洋諸島のあたりでもそのまま手に入っちゃいましたからね。

大里 確かに、私が最近見た資料などでも、日露戦争で勝ったというあたりからの日本の雰囲気は違いますよね。

近藤 あれは、もうちょっと真実を知るべきだったですね。そうすれば、もう少し変わっていたかもしれないですね。

大里 ただ、経済的に日本は豊かじゃないということをお認めして、だけど中国との関係は深いんだと。だから、それをうまく利用して特権を増やしていくんだという。つまりイギリスやフランスは経済力で特権を増やしていくけれども、日本はそれとは違う強みがあるんだと思いますこんでどんどん行った。

近藤 戦争が始まってからの日本人の中国人に対する考え方というのは、私なんかも中学のときに作文を書いたんですけども、もう少し相手の心を持ってやって、お互いに協調しなければいけないよというのを作文で書いたんですよ。ボツになりましたけれども。要するに、「日本の国というのは優秀なんだ。だから、おまえは俺のやり方に付いて来いよ」という言い方ではなくて、お互いに協調しながらやらなければならないような意味の文を書いた記憶があるんですよ。そういったことを無視するというか、そういう風潮が非常に強かったですね。

栗原 その中学にも、中国人の同窓生はいるわけですか。



近藤 ええ、台湾の人が。

栗原 台湾は一応、当時は日本人ということになりますね。

近藤 ええ。台湾の人、韓国の人。台湾の人で私の同窓生、死にましたけれども、江式仁というのがいたんです。彼などは戦後、密入国してきて、東京に来ていました。

栗原 台湾からですか。

近藤 台湾から。

栗原 戦後台湾に帰って、それから日本にですか。

近藤 日本に。そうしたら、そのうちに捕まってしまうって強制送還されたんですけれども。その後、向こうでは出国禁止ですよ（笑）。

栗原 話がちょっと変わってしまいますけど、なぜその方は戦後日本に密入国なんかをされたんですか。

近藤 やっぱ日本の方がよかったんでしょうね。あの頃は台湾の連中というのは、日本に来ればすぐく儲かりましたからね。

栗原 そうですか。

近藤 特権がありましたから。台湾の人で、戦前からずっと残った方で、金持ちの方が結構いますね。池袋とか、あそこら辺あたりで。

栗原 いますね。そういう人ばかりではないんだろうけど、そういう人が目立つというか。

近藤 多いですよ。ああいったヤクザ関係というか、パチンコ屋とか何とかというのがけっこう多いですね。

栗原 銀座にビルをいくつ持っているとか、そんな感じの人がいますね。

近藤 あの頃は、池袋あたりとか、それから横浜でも西口あたりは土地が安かったですもんね。連中にしてみれば、ちょっと工面すればいくらでも買えましたからね。

栗原 天津で戦争中、食糧とかそういうことで苦労することはなかったですか。

近藤 いや、日本人はよかったです。いちばん悲惨なのは、飢饉の年があるわけですよ。そうすると、中国人が毎日、何人が餓死するんですよ。死んだ人をどうするというと、行き倒れになったのをみんな馬車に放り込んで、処分してしまう。人力車を引いて稼ごうということでやっているうちに、走っているうちに途中

でパタンと倒れてそのままなんです。そういう人は、食べ物を食べさせてはだめなんですね。まず、流動物からやらなければいけない。だけど、そんなもの受け付けないような状態で、死んじゃう人が結構いましたね。どこか交通量の激しいところで行き倒れた人なんかは、そのままにされて、骨がそのまま粉になってわからなくなっちゃうとか、そういう話も聞きました。

大里 ああ、轢かれて。

近藤 そのときはどんなものを売っているかという、最初の頃は、普通は饅頭という小麦粉でつくった白いものですね。それから、ちょっと金のない人はトウモロコシの粉。だんだん物が不足してくると、饅頭がこんな色なんです。

栗原 焦げ茶色というか。

近藤 ええ。何でつくっているかという、麩なんです。小麦粉をとりますね。そうすると粕が出ますね。あの麩でつくった饅頭なんですね。それが、チョコレート色だからいかにもおいしそうなんです。私は、「あれを食べてみたい」と言ったんですよ。「あんなの食べられないからやめとけ」と家の人に言われたのを、とにかく買ってきたら、喉に引っかかっちゃって食べられない。でも、そんなものでも汁に浸して食べなきゃ生きていけないという状態なんですね、その頃というのは。私ども天津出身者はそういった餓死した人のことを書いていますけれどもね。家から食べ物を持って行ってやったとか、周りの人から「そんなもの食べさせたってだめだよ」と言われるんだけどやったら、そのまま死んじゃったとか。今でも心の中に残ってしまっているというようなことを書いていますね。

栗原 天津出身の方たちの会報みたいなものがあるんですか。

近藤 今はありませんが、以前はあったようです。ただ、個人的にいろんなものを書いて出していますので。ですから、そういったことを思い出しながら、私もメモしているんですけれども。

大里 天津関係で、同窓会を毎年やっているんですか。

近藤 このところ少なくなりましたが、ほぼ毎年。

大里 私も1回、出席させてもらいましたけれども。新宿の天津飯店での会に。

近藤 あれは、私の弟が主催でやっているんですね。

栗原 それは、何人ぐらい出席されるんですか。

近藤 40人ぐらいですかね。

大里 それで、天津出身の在日中国人も参加していましたね、留学生とか。

近藤 東京に、中国人の天津会というのがあったんですね。弟がそれに毎年出ているので。私も最初のうちは天津会にも出ていたんですけども、このところあまり行ってないですね。

近藤 私は郊外に魚釣りに行ったりしていろいろなところに遊びに行くわけですね。そうすると水筒を持って行くんですけども、なくなっちゃって喉が渴くと、農家の人がどうやって水を飲んでるんだろうというのを見ていると、池の上澄みをスーッとどんぶりみたいなので掬って飲んでるんですよ。あれ飲めるのかというので、私もそのままスッとやって飲みました。もう、喉が渴いてどうしようもなくなったので。でも、何とか生きていますから（笑）。だから、あの頃の貧しい人たちの生活というのを、日本人が今の生活で考えるということは到底できませんね。

栗原 租界は水道ですか。

近藤 水道です。

栗原 みんな水道で。では水には困らず。

近藤 基本的には水道なんです。私の小さい時、小学校に上がる前ぐらいの頃は、地域によってはまだ水道が引かれていない場所があったんですね。そういったところは、水を売りに来ていたんです。それで、私が記憶しているのと絵はがきなんかで見るのとちょっと

違うんですけども、私の記憶しているのでは、日本の四角い風呂桶みたいなやつの上に被せてあるのが大八車みたいな車に載っていて、その後ろのほうに蛇口があって、それで桶に入れて1杯いくらということまで売りに来ていたんですね。それで、各家にはこのくらいの土甕が置いてあって、それに入れていたんですね。私が小学校の頃、父が三井を辞めて別の仕事に変わった頃、一時、戦後引き揚げてくるまで住んだ家の隣に引っ越したんですね。そのときには1週間ほど水が引かれていなかったから、それを買ってその甕に入れたという記憶は残っています。

栗原 ジャあ、地域によって水道が引いていないところがあった。

近藤 それで、1週間ぐらいの間に水道を引いて。

栗原 それは個人で引くんですか。

近藤 ええ、個人で頼んで。だから、引いてある家と引いていない家があるんです。だから、貧しいところは引いていないから1杯いくらで水を買う。

栗原 大通りか何かに管が通っていて、そこから引く・引かないは個人の自由、そんな感じですか。

近藤 まあ、そういう感じだろうと思うんですけども、まだ小学校へあがる前の話ですから記憶が定かでないんですけどね。

大里 今だって、水を売っていて、私が上海で暮らしていたときは、水を運んでくるんですよ。それを買って飲んでいましたけどね。

近藤 それは、水道水が飲めないから、飲み水を買っているんですね。

大里 それとは違うんですね。天津は水道だと飲めたんですか。

近藤 いや、水道だと飲めるとか飲めないというより、水自体がないから。

大里 そうすると、それをまた沸かして飲むんですか。

近藤 私なんかは、子どもの頃は水道の水をそのまま、生水を飲んでいたので、学校では「絶対に生水を飲んではいけないよ」と言われるんですね。ところが、小さい時から飲んでいるから免疫になっちゃっているんですね。それで、私なんかが水道の水を飲んでいて、日本から来ている人は日本の水道の感覚で飲みますね。そうすると、その人はてきめん



写真15 水や氷は色々な方法で売っていた。一輪車の他に、馬車、荷車、天秤等で運んでいた。

に下痢なんですよ。水道の水も、地域によって味が違うんです。というのは、日本租界は白河の水を濾過してやっているんですね。ところが、ドイツ租界とかイギリス租界とか向こうのほうは井戸水なんです。そうすると、井戸水はちょっと塩辛いんですよ。

栗原 海水が混ざっている？

近藤 それが、塩分なのかカリウム分なのかわからないですけども、郊外なんかに行きますと、夏でも土地に霜が降りたように真っ白で、それはカリウム分が結晶になっているんです。

栗原 それは、地下水が上がってくるからですか。

近藤 わからないんですけど、アルカリ性の土壤なんですよ。郊外の池なんかでも、泳ぐとどうしても口に水が入りますよね。そうするとやっぱり、ちょっと塩辛いんですね。

大里 お話が飛びますけど、昭和12年に日中戦争になって、また新しい日本人が入ってきますよね。前からいる人と新しい人は感覚が違くとさっきおっしゃったけれども、せっかく来たけど仕事もうまくいかなくて途中で放って帰るという人もいますわけですか。たとえば、儲けようと思って天津に来たけれども、なかなかうまくいかないとか。

近藤 そういう人も中にはいるみたいなんですよ。と言いますのは、そういった浮浪者みたいなのを保護するような団体があるんですね。私どもの同級生の親父さんがその責任者をやっていて、それで見ていると、いちばん多いのは麻薬中毒ですね、阿片中毒。それで身体がボロボロになっちゃってどうしようもない、それで保護されるというのが結構、日本人でいたみたいですね。まあ、どこの国でも同じですけども、いい人もいれば悪い人もいますので、変な人は日本人でも結構いたみたいですね。

大里 ドッと入って来た人もやっぱり租界に入ってきたんですか。それとも、もっと別のところへ？

近藤 結局、租界にいても租界外にいても、日本人ならば保護しなければいけないので保護しているんだと思うんですけども。麻薬をやるのは、要するにいちばん多いのが三不管のところですね。日本租界の予備地というところですよ。中国人街と日本租界の間の地域ですね。あそこら辺がすごかったらしいですね。どこ

も管理しないところですから（中国人街と日本租界、さらに近くに位置するフランス租界のいずれからも管理されていない地域なので「三不管」の呼称がついた）。私なんかは子どもの頃は「あそこは絶対に行っちゃいけない」、危険だ、子どもなんか行くとさらわれると言われていました。それと、私知っているのは、戦争末期になってくるとみんな片っ端から徴兵されましたね。その徴兵をされるのが嫌で、逃げ出している人が結構いましたね。

栗原 それは、どこへ逃げるんですか。

近藤 もう、中国の別のところにスーッと行っちゃう。

栗原 天津からどこかへ行方不明的に。

近藤 ええ。だから、徴兵令状が届かないんですよ。

大里 逃げ得で、そのままという人もいますね。

近藤 私が知っている人でもいます。私の遠い親戚だった人ですが、戦後そこに行ったら、結構いい商売をやっていましたね。そのぐらいの人は、ちゃんと世渡りがうまくて（笑）。

栗原 徴兵逃れに中国大陆に渡って、行方不明になれば何とかなると、当時そう思っていた人は結構いたみたいですね。

近藤 まず、中国へ渡ると徴兵の率が下がりますからね。そこで行方不明になれば、まず大丈夫ですね。

栗原 でも、当時中国に渡った人たちというのは、日本人であるという証明書、今でいえばパスポートみたいなものを持っているんですか。

近藤 それは、私もよくわからないですけども。でも、私は、一時的に日本に帰ってきてそれでまた中国に行くのに、証明書用の写真を撮った記憶があるんですよ。

栗原 そのためにですか。

近藤 ええ。だから、何かそういった申請書があったんじゃないかと。ともかく、今度天津に帰るんだから写真を撮ろうとって、撮った記憶があるんです。

栗原 領事館には、ここに日本人の誰それがいるというのは……

近藤 ぜんぶ登録されています。

栗原 登録されているはずですよ。そうすると、天津に行った時に領事館に届け出るんですかね。

近藤 それと、中国に入るのに許可証がないと入れな



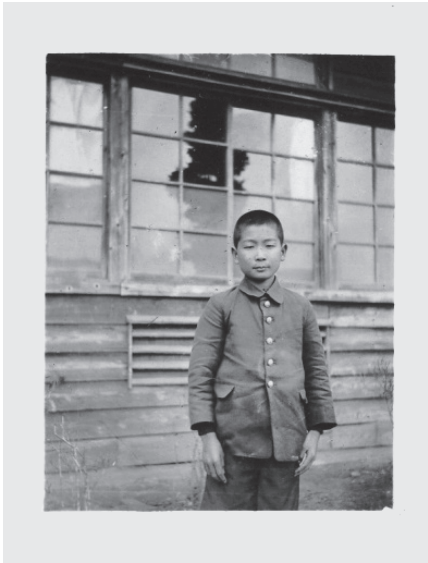


写真16 一時帰国して再び中国に渡る際に撮った  
証明書用の写真。

いみたいです。私の母が亡くなった時に、伯母が奉天にいたんですよ。奉天から来るのに、要するに今でいうビザですか。それを取っていなかったの、途中で捕まってしまって文句を言われて電報を見せて、「こうすることで私の妹が死んだんだから」というので特別に許可してもらって入ったというのは、記憶にあります。

栗原 やっぱ何かの手続きが本当はあったんでしょうね。

近藤 ええ。野放しではなかったみたいです。

大里 天津に入ったらまず領事館に登録するんですかね。

近藤 そうでしょうね。

大里 天津から一時帰国した場合も、何か手続きがいるんですか。

近藤 いや、私もずっと行ったきりで、よくわかりませんけれども。

大里 戦後、日本に帰る時は、どこから帰って来られたんですか。

近藤 今の天津港ですね。塘沽。

大里 塘沽から帰ってきた。

近藤 で、佐世保に上<sup>(8)</sup>がった。

大里 かなりの地域から天津に集まってきて。

近藤 天津の貨物廠に集結して。それで、戦後間もなく避難してきた人たちのうち、張家口あたりから来ら

れた人たちは着の身着のままで逃げて来られましたね。今いろんな本を読みますと、北支派遣軍の駐屯したあたりにいた人は、ソ連から日本人を守って引き揚げさせようということで、ずっときちっと守って避難させたみたいですね。だから、関東軍と北支派遣軍との差はそこだということで、いろんな本には書いてありますね。

栗原 そうすると、天津に来る人たちはそんな混乱状態ではなく？

近藤 いや、混乱状態は混乱状態ですけども、要するに満州のような悲惨なものではなかったということです。それは、着の身着のままで、飲まず食わずで張家口から天津に来られたのは確かですけども、満州の場合は四散してしまったわけですね。襲撃をされたり略奪をされたり。そういうことはなくて、何とか逃げてきたということみたいです。ですから、戦後はそうして逃げてきた人たちが日本人の学校にずっと入っておられて。

栗原 学校に仮住まいしたのですか。

近藤 ええ。私なんかそれに動員されて、貨物廠から米とかそういったものを各学校に運んだことがあります、収容された人達の食糧をね。

栗原 食糧は、天津にあることはあったんですか。

近藤 ありました。あの頃、これは日本経済新聞の『私の履歴書』に出ていましたけれども、紀伊国屋書店の会長さんが天津の貨物廠の隊長か何かをやっておられたんですね。その方が、これをぜんぶ放出しろと

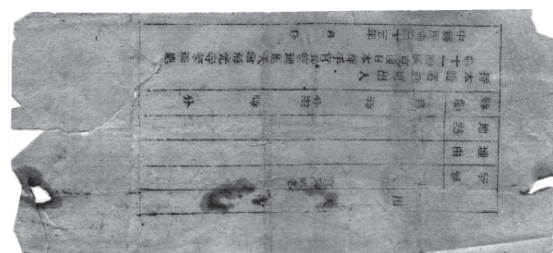
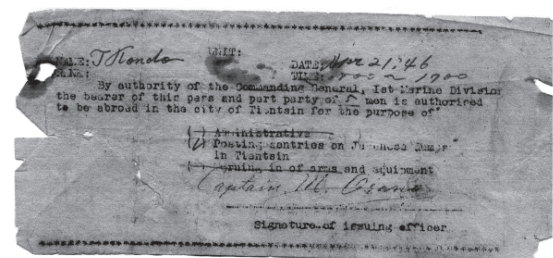


写真17 引揚げ時の貨物廠への入門証

いうことでやられたみたいですね。それで、中国軍と交渉するとうまくないから、貨物廠は米軍がやっていますから米軍と交渉して、アメリカ軍は食糧なんてどうでもいいからやるということで。中国軍だったら食うや食わずの人だけど、米軍は腹一杯食べられたという差があったんですね。そこら辺のところで米軍とうまく交渉したみたいです。だから、けっこう戦後でも、軍の隊長とか上部の責任者の判断によってずいぶん違っていた。そこら辺のところを「日本の軍隊は悪かった。悪かった」というんじゃないくて、そういう人たちがいるということを記録に残さなければならない<sup>(9)</sup>と思いますね。

栗原 天津から引き揚げる時には、荷物は1つだけとか条件があるんですね。

近藤 持てるだけです。だから、体力のある人はいくらでも持てる。私なんか、家の中で、どこまで持てるか背負って練習しました。それで、背負うのに何をしましたと思います？ 帯芯でバンドをつくって、竹行李がありますね。行李を背負うのにそのままだと壊れてしまうから、あれにぜんぶ布を縫いつけて、ぶつけても壊れないようにして、それを背負うわけです。ですから、うちはわりかし引き揚げてきた中では持って来たほうですね。若手がいたから背負えたし。

大里 それも、場所によって違うんですね。私たちの数人で租界関係の本を書いた時に、上海の事情を書いた文章もあるんですけども、それによると、かなり厳しい条件でしたね。1人ずつ、持つものはいくら、何を持ってはだめだという制限があるんですよ。上海在住の日本人のリーダー格の人が、国民党の将校と交渉するわけですよ。それでも、中国側の対応が善意でわりによかったというんだけれども、今のお話を聞くと天津のほうではもっと緩やかな感じで。

近藤 やっぱり、交渉するときに中国は何でも金次第ですよ。だから、そこら辺のところをうまくやる人がいるかないかで、差がついちゃうと思いますね。だから、私どもがずっと引き揚げてきて豊橋の駅まで来て、荷物をずっと積んでおいたんですね。そうしたら他から引き揚げてきた人が見て、「荷物をそんなに持って来たんですか」とびっくりしていましたね。

大里 満州にいた人なんて、途中で奪われたりしてい

ますね。

近藤 満州の人はもう、持って来れないですね。持って来ようといったって、物がなかったですものね。あの時は、米とか砂糖とか塩というのを、軍足という靴下にぜんぶ詰めて持って来ましたね。あの時に持って来ていちばん良かったのはサッカリンですね。もうちょっと持って来ればよかった。あの頃は甘みがなかったから。

栗原 記憶していますよ。でも、サッカリンであまりおいしくなかったんだよね。

近藤 おいしくないけれども、他に甘みがなかったですからね。

大里 1ヵ所の状況だけで理解するというのは危険だね。台湾はどうですか。

栗原 台湾はかなり厳しいですよ。厳しいし、さっき言った昭和町の人たちも、やっぱり小荷物ひとつでね。それから、貴金属はぜんぶ取られる。

近藤 貴金属はだめでしたね。

大里 それは天津も？

近藤 同じです。時計もだめですね。金は一切だめですね。

栗原 ただ、横浜税関に、引き揚げた人たちの遺留品がそのまま何十年も取っておかれていて、それが展示してありますよね。あの中にはけっこうお札なんかがありましたね。持ち主がわからないといって、税関が保管してますというのが展示されていましたね。

近藤 もう、あの頃の方でお金を税関に置いたままの方というのは、生きてないですね（笑）。

栗原 ちょっと無理だろうなと思ったけれども。

近藤 あの時、人によっては50銭の紙幣をこんなに持ってる人がいましたね。50銭紙幣は持って来てもよかったですね。高額紙幣は使えなかったけれども。確かに、張家口あたりから逃げて来られた方というのは、荷物なんてほとんど持っていませんでしたね。

栗原 でも、天津は食料品を持って帰ろうというぐらゐの余裕というか、食料品はあったんですね。

近藤 いや、戦後、貨物廠にあった食糧を日本人に分けましたね。たとえば小麦粉なんかの場合は、メリケン袋（1袋で約20kgの小麦粉が入っていた）いうんですか、それを1人1袋ずつ配りました。

栗原 豪勢といったら変だけれども、そうなんですか。

近藤 「おたく、何人ですか」「5人」と言ったら、「はい、5袋」と。中学生が動員されて行って、貨物廠から持って来て。それはやっぱり紀伊国屋の方ですよ。あの方のおかげですよ。

栗原 それは、戦争が終わった直後ですか。

近藤 ええ。

栗原 じゃあ、まだ中国軍とかが来る前に。

近藤 来る前にどんどん出して。

栗原 その差は大きいですよ。

近藤 あの頃、私なんかよく聞いていたのは、貨物廠は北支の軍隊も含めて全日本人の2年分とか3年分の食糧がありますと言っていましたね。それから、兵器廠だったら弾薬なんかでも1年分あるとかね。だから、私たちも負けたといったって、「エッ？」ですよ。まだ倉庫は余裕あるよと。

大里 天皇の終戦の話は、どこで聞いたんですか。

近藤 工場です。工場で、みんな会議室に集まれって。

大里 ちゃんと聞こえるんですか。

近藤 まあ、なんとか。訳はわからなかったですけど。

大里 声は聞こえたよ。

近藤 ええ。

大里 誰か解説をするんですか。

近藤 いや、特にそれはなかったですね。だって、私も終戦までは工場で銃をつくってくるか、その後は教練ですね。教練で何をやっているかといったら、匍匐前進ばかりですよ。匍匐前進をやるということは、とにかく戦車が来たらどうやって戦車の下に突っ込むんだというやり方ばかりですね。それとあとは、銃剣術。そういうようなことばかりです。ちょうどその時に朝鮮出身の兵隊が我々が教練を受けた学校にいたんですよ。学校の音楽教室でその朝鮮出身の人がピアノを弾いたりして。私の同級生にも朝鮮出身の人がいたんですけど、そいつも音楽がすごくなくて、弾いたりしていろんな話をしていたんですけども、その朝鮮出身のが「ああ、もう兵隊なんか嫌だよな。戦争なんか嫌だよな」と言っていましたよ。「そんなこと言って、よく捕まらないな」と思っていたんですけど。そいつ（同級生）とは戦後、ソウルで会いましたけど

ね。ソウルで、米軍の将校クラブでバンドをやっていました。

栗原 音楽のほうに行ったんですね。

近藤 話を聞いたら、東亜放送の専属で、ハモンドオルガンでは韓国でいちばんだと言っていましたね。

栗原 なるほど、そういう人もいたんだ。

近藤 ソウルに行ったときに、「今から鰻を食いにこう」と言われて、漢江の上流に行って、河原にあるアンペラ小屋のところへ行っただけですよ。私の天津中学の韓国出身の先輩の人が2人と、皆で4人でいったんです。「おい、近藤。鰻どのくらい食べる」と言うんですよ。どのくらいって、日本だったら1串とか2串ですよ。「1貫目か？」と言うんですよ。「いいか、4人だと1貫目か」と言って頼んでくれるんですよ。1貫目といったら、直径40cm位の鍋にいっぱいさばいたやつが入っているんですよ。そして、若い女性が来てそれを焼いてくれるわけです。「おい、近藤、冷めたらうまくないから早く食えよ」と言うんですよ。食べると、次にパッと来るわけです（笑）。結局、4人で1貫目を食べちゃった。あれはもう、鰻だけで腹一杯。びっくりしました。

大里 鰻は日本のと同じなんですか。

近藤 おいしいですよ。

栗原 いわゆる蒲焼き？

近藤 蒲焼き風でね、さばいてあって、炭火で焼くんです。

栗原 それは、戦後何年ぐらいですか。最近ですか。

近藤 いや、1969年か70年か、そのくらいですね。

栗原 じゃあ、日韓条約の何年も後ではないですよ。

近藤 今の朴大統領のお父さんが大統領の頃ですよ。それで、朝鮮ホテルに行ったら朴大統領と奥さんが、日曜日になると礼拝で来られて。キリスト教の教会が朝鮮ホテルのところにありましたから。

栗原 そこへ来ていたんですか。そうすると、天津というのは戦争中も食糧不足はなく、戦闘も空襲もなくという感じですか。

近藤 ええ。あの付近では爆撃は、塘沽に1回あったんですかね。港ですね。

大里 それは、米軍ですか。

近藤 米軍です。それで、朝礼の時などに学校の屋上



にあるレーダーが動くのが見えますよね。動く向きによって、米軍の飛行機が来るか来ないかわかるんですよ。

大里 日本側のレーダーですか。

近藤 そうです。「あっ、きょうは来るぞ」というと、日本の飛行機が逆方向にみんな飛んで行ってしまいうんですよ。

栗原 退避というか、逃げてしまう。

近藤 逃げちゃう。

大里 その頃はもう、負け戦というか。

近藤 そうです。

大里 それは、いつ頃そういう感じがあったんですかね。

近藤 19年ぐらいかな。

大里 じゃあ、1年前にはそういう感じで。

近藤 1年前にはそうですね。20年になったら、学校にはほとんど行きませんでしたから。その前の、学校にちょくちょく行っている頃です。

大里 そうするとやっぱり、日本はもうだめだぞと感じるようなことがあったんですか。

近藤 いや、私なんかは、天津の場合はわりかし物も豊富ですし、楽でしたから、そんな感覚はなかったですね。ただ、学校の兵器庫に三八歩兵銃が百丁位あるわけですね、最初は。それが、三八歩兵銃の程度のいいのは軍に持っていかれるようになって、そのうちにぜんぶなくなりました。だから、それでおかしいなと思っていたんですよ。

栗原 中国国内の日本軍と国民党なり八路軍なりとの戦争が、どういう状況になっているみたいな情報というのは、租界の中で流れるものですか。

近藤 いやあ、新聞だけです。そうでなかったら、あとはまわりの様子を見るだけ（笑）。

大里 租界の中は、独自の新聞はあったんですか。

近藤 あります。

大里 そこに住んでいる人が経営している新聞ですか。

近藤 はい。私の同級生で永瀬というのがいたんですけども、そいつは京津日日新聞の経営者の息子ですね。

大里 それは、歴史の古い新聞ですか。

近藤 ええ、古い新聞です。その永瀬のお母さんの親

父さんが創設したんですね。それで、永瀬の親父さんというのはもともと小説家だった人で。

大里 それを、租界に住んでいる人が読む。

近藤 それと、天津日報というのがありまして、要するに読売と朝日みたいなものですか（笑）。

栗原 それが2大新聞。

近藤 ええ。

大里 どっちが読売ですか。

近藤 いや、わかりません。戦時中、統合されて軍一色になったんです。

栗原 軍の宣伝新聞みたいな。

近藤 天津の民団の中に青組と白組という派閥があって、二つの新聞のどっちが青組でどっちが白組かわからないですけども、対立していましたね。

栗原 その青組、白組という派閥は、何か利害関係があるんでしょうね。

近藤 あったみたいですね。

大里 たとえば、上海の場合はエリート、要するに会社勤めと、一発金を儲けて入っていった商人とか、それで地域的に分かれたと言われますよね。金持ち群と、叩き上げ群といったような。

近藤 天津の場合も、そういった利害関係で分かれていたみたいですね。いろんなことで、日本の国会でも問題になったようで、それほど有名だったみたいですよ（笑）。

大里 でも、ありそうだよ。

近藤 その辺のところは、私の弟が書いた本の中に入っている<sup>(10)</sup>と思います。

大里 その新聞から、ある程度の情報は得られていたんですか。

近藤 はい。

大里 でも、それはそんな深刻な情報はないですよ。

近藤 ええ。それと、だいたいあの頃は、軍の新聞になってくると都合の悪いことは書きませんから。いちばん不思議だったのは、ある土地が、この間占領したはずなのにまた占領したのかと（笑）。負けたときには書かないで勝ったときだけ書くでしょ。そうすると、同じ土地で1回やって、逃げて、もう1回やると。だから、2回も3回も占領するわけですよ。

大里 その新聞は、日刊ですよ。それを配達してく



写真 18 空から見た大和公園。敷地内の左側に天津神社、上方に居留民団の建物が見える。道路を隔てた左側下方に見えるのが領事館と領事館警察署

るんですか。

近藤 はい、配達してきます。それと、あと日本の新聞が船で来るんですけども、だいたい1ヵ月遅れぐらいですね。

大里 図書館のようなものは、租界の中にあったんですか。

近藤 あります。民団の建物の一角にありました。

大里 民団というのは、大和公園の裏側にあった？

近藤 そうです、そうです。だから、民団と大和公園のちょうど間の離れているところが図書館だったんですね。

大里 前にお話ししたことがあると思いますが、私の故郷（秋田）出身の石川伍一という、諜報活動をやって日清戦争の時に天津に留まって、目を付けられてそこで捕まるんですよ。処刑されて、戦争に勝ったということで後で掘り返して日本に遺体を運んで、かなり大々的に葬儀をしたという人物がいて。ただ、天津で犠牲になったということもあって、その公園の敷地内にちょっとした記念碑を建てたらしいんですよ。私はそれにこだわって、どこにあるんだろうと思ってそこを訪ねたら、今は軍の施設の一部になっている。人民解放軍というのは8月1日が記念日なんです。1927年8月1日が解放軍の最初に蜂起した日だとして、「八一」というと解放軍を指していて。それで、昔の大和公園のあたりに、最初に行った時は確か八一劇場と名前が付いた体育館的な大きな建物があったんですが、ところが次に行った時は、また建物がだいぶ変わってしまっていてね。門番の兵士が立っていて近づけそうにない敷地の奥に近代的なビルができていて、結



写真 19 天津神社

局、解放軍だから入れないんですけどね。ここに神社やいろんな記念碑が建っていて、神社の入り口はこの辺ではなかったかとか、想像を巡らしたことがあるんです。その神社の向かい側は警察か何かだったんですか。

近藤 向かい側というのか隣というのか、道を隔てた隣ですかね。

大里 隣が警察の本部じゃないですか。神社の道路を隔てた向こう側が。

近藤 領事館ですね。それと領事館警察。同じ建物なんですけど、入り口が別で違うんですね。警察がこっち側で領事館があっち側で。

大里 まさに神社、居留民団、領事館、そのへんが日本租界の中心なんですね。

近藤 結局、租界が北側から発達していていますから。ですから、電車通りがありまして、その電車通りを中心として商店街、それから川岸には貿易商のビル、伊藤忠とか三井洋行とか、武蔵洋行とかありまして、その間に呑み屋街とかそういうものがあり、それで電車通りがあって、それからちょっと足を延ばすと、神社から学校、幼稚園というような格好ですね。それで、順番に建設されていったということですね。

大里 私、久々にこの前、ある学会があって南開大学に行って日本租界に寄ったんですね。そうしたら、あるところからは公園みたいに変わっているんですね。

近藤 ああ川のほうですね。

大里 川というよりは、川じゃなくて脇のほうというか、もともとはたぶん日本租界の一部かな。それともフランス租界か。だいぶ変わったなという印象を持っ

たんですけど。

近藤 電車通りから川の間のところがずっと緑地帯になっているんですね。あれは結局、天津の歴史からしたら、そうとう非難されているんですね。あれは、香港系の市長さんかな、銀行系の市長さんかな、開発するということで、ぜんぶ壊しちゃったんですね。そうとうそれに反対の陳情があったみたいですけども。

大里 びっくりしますね。

近藤 あそこは、日本租界の発祥の地ですもんね。あそこら辺をなしにしまうと、歴史がなくなってしまいますよね。

大里 でも、住んでおられたところはまだ残っているんですよ。

近藤 いやいや。

大里 その一带ですか。公園は？

近藤 そうです、そうです。生まれたところは、もう公園です。場所もよくわからないです。だいたいこの辺だなというぐらいにしか。それから、私が終戦までいたところもアパートになってしまっていて、ありません。

大里 まさか、昔住んでた人たちが陳情に行くわけにいかないしね。

近藤 もし陳情したら、日本人が何を言っていることになる（笑）。でも、イギリス租界、フランス租界はちゃんと残しましたもんね。

栗原 その辺はやっぱり、歴史的な遺産とか観光用とか、いろいろな配慮があるんですかね。

近藤 そうですね。それと、やっぱり建物がいいですもんね。

大里 日本租界のメインストリートというか、満州国皇帝の溥儀が住んでいたあのへんの通りは残っていますよね。

近藤 いや、あそこら辺あたりは壊す計画になっていたみたいです。でも、それが止まってしまったので。だから、あれから西のほうもだいぶん残っていますよね。本当は海光寺からちょっと北側に来たところ、あのへんのところもいい建物があったんですけど、あれをぜんぶ壊してしまいましたもんね。

大里 旧大和公園とか学校とかという地区は残ったんですね。建物は違ったかもしれないけれども。



写真 20 近藤氏の通った淡路小学校

近藤 私たちの出た淡路小学校なんかは、建物がいいですからね。だから、あれは残っていますね。それから武徳殿も、ちょっと見た目がいいから残したのかもしれないですね。

栗原 武徳殿なんて、よく残しますね。

近藤 あれを残したというのは、あそこが一時的に医学院か何かになっていたんですね。建物もいいですし、広さも結構ありますからね。ただ、神棚があったところとか、それから弓道場、あそこら辺のところかわけがわからなくなっちゃっていますね。

大里 栗原さんは行ったことない？

栗原 ないんです。たとえば、昔のことをきちんと知ってらっしゃる方がお元気なうちに、変わりぶりというのを比較しておいていただくとありがたいですね。

近藤 天津の大学の方が、昔の写真と今の写真を比較して書かれた本を出しておられます。それを私、スキャンしてあるので、もし必要でしたらご覧に入れます。

大里 それは、1冊になっているんですか。

近藤 日本租界が1冊になっているんですけども、中国語でぜんぶ書いてあるんです。

大里 本は、今は買えないんですか。

近藤 いや、大学の研究誌として発行したような本ですね。

大里 最近、行かれたんですか。

近藤 いや、もう2年前ですかね。

大里 私が行ったのは去年ですから。

近藤 確か2年前に行って、それで最後にするつもりで。弟があそこで展示会をやるというので、一緒に行ったんですよ。



大里 どこで展示会を？

近藤 天津の何とか記念館。周恩来記念館のちょっと西側のところですよ。

大里 租界とはちょっと離れていますよね。日本租界の場所でやられたのかなと思って。

近藤 いやいや、そうではなくて。それは、弟の持っている資料をそのグループに貸して、それを展示したんですね。

近藤 私なんかは、小さい頃はアマ（阿媽、お手伝いの女性）に育てられたんですね。アマは日本語はしゃべれない、中国語だけです。ですから私は、小さい頃は中国語と日本語のチャンポンだったみたいです。それで、第一次天津事変の頃にみんな避難をするときに、私は日本に帰ってきたんですね。日本に帰ってきたことはぜんぜん覚えていないですけども、その頃のおばあさんとかおじいさんの話をいろいろ聞くと、「あの頃は日本語が全然しゃべれなかったじゃないか」と言われるわけですよ。こっちは、天津では中国語と日本語と混ぜてしゃべっているから、日本語を全然しゃべらなかつたわけではなかったと思うんですけども。アマには方々連れて行ってもらいました。たとえば支那の芝居——京劇ですね。ああいったものを、フランス租界のほうに劇場があって連れて行ってもらったり、アマ仲間で麻雀をやる時に一緒に連れて行ってもらったり。食べるものでも家ではなかなか食べられないようなものを食べさせてもらったりとか。アマには可愛がってもらって、だから纏足なんかを見ましたしね。

栗原 やっぱりアマさんも纏足をしていて。

近藤 ええ。それから、産毛を取るのに糸を使って取ったりね。

栗原 何歳ぐらいまでアマの人がいたんですか。

近藤 小学校の頃はまだいましたね。

大里 同じ人ですか。

近藤 いや、時々変わりましたね。

大里 終戦の頃は、やっぱりいたんですか。

近藤 終戦の頃は、アマはいなかったですね。ボーイはいました。ボーイなんかも、終戦の時にはぜんぶ住所を書いてもらって別れたんですけどね。あの頃は、私が予科練の志願しに行ったら、ボーイに言われまし

たよ。「いい鉄は釘にならない、いい人間は兵隊にならない」と。

栗原 ああ、兵隊なんかになるなと。

近藤 そのときに覚えたんですね。それから、戦後、中国の巡査が街角に立っているわけですよ。その人と話をしていたんですね。その人は、強制連行で日本の炭鉱に行って、戦後天津に帰ってきていて、「いま日本へ帰ったってだめだから帰るなよ」と言うわけですよ。「食べるものもないし、いいことない。台湾人だって言ってこっちに残ればいいんだよ」と言っていましたけどね。

大里 それは、強制連行から帰って。

近藤 だから、いま考えてみると、強制連行された人がよく日本人と話をしてくれたと思っているんですけどね。あの頃は、うちで使っていたボーイなんかも、「日本人のところで使っているという証明書を書いてくれ」というわけですよ。そうじゃないと、途中で強制連行されると。こうやって話していますと、だんだん断片的に思い出してきますね。

栗原 強制連行というのは、いわゆる捕虜を強制的に連行しただけではなくて。

近藤 町で歩いている人をパッと。

栗原 そういう話になると、やたらひどい話ですね。

大里 いま天津に、日本で強制連行で亡くなった人の遺骨が、名前が必ずしもわからない人ですかね。それを1950年代に送還して、それで納めている慰霊塔みたいなのがあると。それが天津にあるということは、港から天津の町中に運んだということですよ。なんで天津にあるのかなと、私は思うことがあるんですけどね。強制連行で必ずしも天津地区の人とは限らなくて、天津にそういう慰霊の場所があるというのは。

近藤 天津からもけっこう連れて行かれたみたいですね。

栗原 きょうは近藤さんご自身の体験されたことを中心に、興味深いお話を伺うことができました。お話はまだまだ続きがありそうで、またの機会を楽しみにしております。

## 注

- (1) 恒弘氏の弟である近藤久義氏の『天津を愛して百年、そして子々孫々』(新生出版、2005年)によれば、母たけの兄、日高松四郎氏が1901年に天津に渡っている。同書10頁。
- (2) 同書によれば、武彦氏は1900年、愛知県八名郡に、近藤準治郎の次男として生まれ、尋常高等小学校高等科を卒業後、逓信省の逓信養成所に入所、その後郵便局で通信技手として勤務。1917年に松四郎を頼って天津に渡り、天津日本青年会の夜学校に通い、英語と中国語を習得した、とある。同書51頁他。なお、天津日本青年会については、前身は天津日本基督教青年会であり、1919年に天津日本青年会となる。会長は天津総領事であったという。同書96頁。
- (3) 中日学院の前身は、1921年創立の天津同文書院。1925年に中日学院と改称された。
- (4) 1937年、日本軍の空襲により南開大学は被害を受け、長沙に移転した。残された思源堂を天津日本中学校の校舎として利用した。
- (5) 1939年、天津の英・仏租界において、中国連合準備銀行天津支店の前経理で、天津海関監督の程錫庚が暗殺された。日本側は容疑者の引き渡しを要求したが、英国側は証拠不十分を理由に拒否、日本側が対抗して英・仏租界に通じる道路で検問をし、日本への協力を迫った。
- (6) 三井物産の安川雄之助の自伝『三井物産筆頭常務安川雄之助の生涯』(東洋経済新報社、1996年)によれば、「天津支店長としては明治36年から42年まで足掛け7ヶ年いた。……僕が乏しい経験で見ると在外居留民の風習は、お互い同志がじっくり融和ができない。……しかし一度祖国を離れて海外に居留する者は、多少の利害関係や恩怨はあったにしろ、帝国国民たるに相違ないのであるから、融和円満互いに協力精励して祖国のために活動せねばならぬのである。……この見地から僕は天津在職中居留民団長を勤めまた商業会議所を組織することにした。居留民団は民団法により日本人全部がこれに加盟し、商業会議所の方は商業に従事するものの機関としたのである。」(74頁)とある。
- (7) 白河、永定河などの下流にある天津では、時々洪水があり、この年は、白河上流の大雨により、8月20日に洪水に襲われ、日本租界はほとんど冠水した。その直前には、バッタの大軍の飛来があったという。前掲『天津を愛して百年、子々孫々』186頁～208頁。
- (8) 引き揚げについては、日本ではサッカリンが高価であるということで、帰国の際に持ち帰ったこと、また、長崎の佐世保市南風崎に上陸したことなど、『天津を愛して百年、そして子々孫々』にも詳しく記している。248頁～252頁。
- (9) 『私の履歴書』の著者松原治は、自分の履歴について、『三つの出会い』(日本経済新聞社、2004年)を著し、より詳しく記している。同書によれば、陸軍経理学

校を卒業した松原は、北支野戦貨物本廠の糧秣課長として派遣されており(34～35頁)、「北京、天津に米軍が入ったのは十月半ばだった。沖縄戦を戦った第三海兵師団が進駐してくるとの話だった。……最も大事なのはコメだった。収穫期に向けてコメを確保するための班をつくり、黄河周辺の農家に買い出しに行った。蒋介石の軍隊が北京、天津に進出してきたのは翌年一月半ばだった。……帰還作業は非常に円滑、整然と進んだ。」(39頁～40頁)と記している。

- (10) 西村正邦『天津日本租界物語』(1997年)に民会議長・亀沢省朔が天津小学校の同窓会誌(1968年)に寄稿した文章が掲載されている。同文章によれば、「赤派の大將株は大木幹一弁護士、……青派の方は、始め大將株が田村俊治東亜病院長で、……赤派には森川昭太の主宰する京津日々新聞、青派には西村博士主宰の天津日報が、夫々肩入れし、永年揉み合ったが、やがて戦争の足音が迫るにつれ、これらの論争も自然に解消された。……これらは、今にして思えば大して他意あるわけではなく、……年中行事のお祭り騒ぎのようなもの」(82～83頁)とある。